

# 発達に応じた子どもの世界の広がり

—わくわくフェスウィークに向けての取り組みから—

廣 瀬 三枝子・林 美 代

## 1. 研究の所在と目的

コロナ禍における保育も3年が経過する中、各幼稚園において様々な行事の在り方を見直し、三密回避を意識した行事スタイルが改善に改善を図られてきている。何より、子どもたちの健やかな成長を願った保育者の子どもたちに対する思いや願いを再認識する機会となったことで、行事の意義やその目的についても、現行の『幼稚園教育要領』で示された「幼児期に育みたい資質・能力」を踏まえ全教職員でカリキュラム・マネジメントが実施され、様々な取り組みが新たに深化されようとしている。

筆者らも幼稚園に携わる中で、コロナ禍までのマンネリ化した行事体制と保育に対する考え方について、立ち止まって考え直す機会を得たことで、教職員間で話し合い、行事の目的や意義を再認識することができた。その行事の中のひとつが、コロナ禍前までに実施していた作品展である。

これまでの作品展は、保護者に子どもたちが制作してきた物を展示して、その作品を観覧していただくことに視点が置かれてきた。そのため、その飾り方、作品の出来栄に重点が置かれ、展示日も休日の一日をかけて、保護者会行事も含めてお祭りのように賑わう時間を設けていた。

しかしそのような形式での作品展はコロナ禍では難しいため、作品展そのものを中止にするのかどうかという話し合いから始まった。そして、作品展の

目的や意義を見直すこととなった。その話し合いを重ねる中で、初めは行事の見直しという視点から入ったものの、最終的には教職員にとって、子どもたちの思いや考えを表現する教育・保育の本質的なものを見直す機会となり、日々の保育の在り方を見直して改善していくチャンスとなったのである。「今までずっとしてきた行事だから」と先輩に教えてもらって進められてきたというマンネリ化したスタイルや考え方について、若い教職員も含めて疑問に思うことや納得できていないことを出し合い、子どもの「主体的・対話的で深い学び」に繋がる教育・保育という視点を中心に、何を大事にしていかなければならないのかを確かめ合った。

令和元年度は、作品展は保護者に見ていただくという意識は強かったものの、作品作りの過程や今までの保育経過を大切にしながら進めることで、子どもたちの楽しい思いに着目した内容を展示した。日程も、三密回避のため場所や人数を制限するために、一週間放課後の時間に設けることとなった。

保護者からは、作品展が中止にならなかったことに感謝される中、全教職員は、保育の過程を保護者にも伝えることができたことで、子どもたちの思いに添った作品づくりを意識できるようになっていた。その結果、翌年には、子どもたちの主体的な作品作りに意識が高まり、子どもたちが心を動かして取り組む姿から、作品が捉えられるようになり、展示スペースを子どもたちと考えるように変化していった。

昨年度は、子どもたち一人ひとりが心を動かし作品作りに夢中になっていく様子を捉えながら、その一人ひとりが作り上げた作品を、子どもたちと一緒に飾り、子どもたちが中心になって作品の展示を行

うことができた。その作品は、どれも日々の保育の中で生まれてきたもので満たされた。それにより、展示期間の保育中に、何度も子どもたちが作品を見に行き、作品を取り換えたり、改良したりしていた。年長児の作品を見て感化された子どもたちが、年齢を超えて、同じような作品を一生懸命作る姿も見られ、年長児の横に飾る様子も見られた。この数年間の内に、保護者に見ていただくための作品展から、子どもたちが主体の作品展へと変化を遂げていった。

このような経過を得て、今年度は、子どもたち自身が心を動かして日々の遊びから生じた作品を展示するため、名称を「わくわくフェスウィーク」と改めてホールに結集し、全園児・保護者・全教職員で共有して子ども主体で楽しみたいという思いで取り組むことになった。そして教職員間で、保護者に対しては、今子どもたちが生き生きと活動している中から生まれたものやことを展示して紹介することで、今の育ちを共に喜び、分かち合いたいという願いを共有した。また、子どもたちに対しては、主体的なものやことに関わり、心を動かして取り組む表現の世界を十分に味わってほしいと願い、保育者が発達段階を考慮し、子どもたちの心に寄り添って進めることにした。

コロナ禍前までには考えているようで意味深く考えられていなかった「一人ひとりが、主体的に心を動かして取り組む」という視点を意識できたことは、これまで改善を続けた結果でもあり、一か所にまとめて展示するという環境においても、子どもたち自身が何度もホールに足を運び、作品に親しみ、自分の関わった作品以外にも心を寄せ、友だちと一緒に作品内容をより理解できることへの期待に繋がっている。保護者のための作品展から、幼稚園生活の中での子どもたち主体的遊びの過程として捉えられるようになったことは、幼稚園における大改革の期間になったのではないだろうか。

そこで、今年度の作品作りにおける取り組みの過程の記録から、発達に合わせた取り組みがどのようになされ、どのような視点を大切にしながら子どもたち主体で進められてきたのかを子どもの姿と保育者の支援から分析・考察することとした。今回は3歳児、4歳児の記録を中心とした取り組みから、ど

のような発達が見られたのかを探っていきたい。

## 2. 研究の方法

### (1) 研究対象

香川短期大学附属幼稚園の園児及び保育に関わる教職員

### (2) 研究方法

- ①「わくわくフェスウィーク」に向けた子どもの様子を観察・記録する。
- ②子どもの様子や保育者の支援を年齢ごとに分析・考察する。
- ③活動の影響（効果や問題点など）を考察する。

## 3. 保育実践と考察

### (1) 3歳児の世界 ―初めての体験からイメージを広げる

本園の3歳児クラスには、3歳児入園の子どもと満3歳児入園の子どもがいる。そのため、園での経験は異なるが、まだまだ初めての体験も多い。その初めての体験から「わくわくフェスウィーク」へと繋がっていく過程を見ていく。

#### 1) 感動体験が子どもたちの心を動かしいろいろな発想へと繋がる

【事例1：色水を太陽にかざして】(2022年9月5日)

隣のクラスで、和紙と水性ペンで作った色水ジュースを並べて遊んでいる。それをA児が借りて一緒に並べる。昨年の作品展でも同じような色水ジュースを経験しており、「A児も作った!」と話す。保育者が色水ジュースを借り、「キラキラしてきれいだね」と太陽の光にかざしてみる。すると、「A児もする!」と同じように太陽にかざしてみる。背伸びをして太陽の光の加減を調整し、一番キラキラするところを探し、「キラキラしてる」と嬉しそうに反射の光をずっと見ていた。

これは何気ない日常の1コマであったが、A児にとっては心を揺さぶられた体験である。遊びの中で出会った色水を太陽の光にかざすという出来事に



写真1 色水を太陽にかざす

よって、色水が太陽の光に照らされてキラキラすることに感動したのである（写真1）。

そして、この体験によって子どもなりのイメージを持ち、心の中にイメージを蓄積させていく。そのためには、保育者の援助が欠かせない。子どもたちは保育者の言葉や行動に大きな影響を受ける。保育者が色水ジュースを太陽の光にかざして「キラキラしてきれいだね」と伝えることで、子どもは自分もやってみて、今以上にきれいなところを探して満足した。保育者がして見せた色水ジュースを太陽の光にかざす体験から感動が生まれ、さらに子どもなりに探究しながら次の発見や感動に繋がっていった。

さらに保育者の願いとして、水の光の反射が地面に映るのもきれいなので子どもたちに見てほしいということもある。そのため、芝生ではないコンクリートやウッドデッキなどで光に透かしてみたいと願っている。遊びの中に保育者の願いを取り入れ、環境を考えながら子どもたちにまた新しい感動体験を伝えたいと思うからである。子どもの心の中への豊かなイメージの蓄積は、それらが組み合わせられてやがていろいろなものを思い浮かべる想像力となり、新しいものをつくりだす力へと繋がっていくといわれる<sup>1)</sup>。この事例のような感動体験が、これからの表現を支えるのであろう。

【事例2：テープの違いを感じて】（2022年9月6日）

午前中、廃材遊びをする。1学期にはなかった廃材コーナーができたので、セロハンテープだけでなく養生テープやガムテープも並べ、好きなテープを選べるようにしておいた。

すると、入園時に幼稚園探検のために保育者が用意した双眼鏡を覚えていたのだろう、B児はトイレットペーパーの芯を2つ付けて「めがね!」と遊びだす。最初はセロテープを使っていたが、「こんなテープもあるよ」と養生テープを出すと、幅が広いので安定しやすく人気になる。そのうち、追加で眼鏡を3つ作ったかと思うと、それらを繋げて貼り始める。「せんせ、もっとって!」と接続部分が安定するまでテープを重ねて、「望遠鏡は、もっと、大きいんよ」と話す。4つ貼り終えた後に覗いてみると、「見えん!」と言ふ。眼鏡が少し曲がっていて見えなかったようだ。「どうやって直そうか?」と聞いてみると、「長いけん、これのける」と言ふ、自分から4つ目をはがす。

また、ペットボトルを貼り合わせようとセロテープで頑張っていた子どもにもガムテープを提示する。安定して貼れることを発見し、「せんせ、ガムテープ（ちょうだい）」が後を絶たなくなる。机や廃材かごに切ったガムテープを並べて貼って取りやすいようにしても、多くの子どもたちが工作に使用しようとっていくので間に合わない。

この事例では、子どもたちは様々なテープを使うことで、セロテープよりも養生テープやガムテープのほうがテープの幅が広いために強く安定して貼れることを発見した。この体験を通して、テープにはいろいろな種類があり、それぞれの使い方やその性質に気づき始めている。「こっち（養生テープやガムテープ）のほうが強い（安定する）」といった小さな感動と発見が、今後の制作活動に繋がっていくのだろう。遊びを通して物の性質の理解を深める、まさにそういう体験であった。

また、B児は「望遠鏡=長いもの」というイメージだったので、できるだけたくさんトイレットペーパーの芯を繋ごうとした。しかし長すぎると持てない、少しずつ曲がってしまうということに気づいたようだ。長くしたいという思いと、向こう側を覗いてみたいという思いで葛藤した。その結果、「長くしたいけれど向こう側が見えないのはもっと嫌だ」と考えて、子どもなりに改良を行ったのである。



写真2 眼鏡

やってみて分かることがある。そしてやりたいけれどもうまくできないので、どのようにするか子どもなりに考える。そのような試行錯誤の繰り返しに次に繋がっていく（写真2）。

自分で子どもたちがどうするか決めていくためには、保育者と一緒に考えるということも重要である。どのような方法をとっても間違いではない。自分で決断して実行するところまで保育者として援助をすることが必要だと考える。そのためには、子どもの心の動きに寄り添うことを大切にしたい。

### 【事例3：花火作り】（2022年9月9日）

夏休みの経験として、花火やお祭りを経験した子どもが多かった。3歳も後半になり、はさみを使って何かを作ろうと花火の制作を提案する。初めは紙コップを用意していたが、飾ったときに色水のように透けて見えるほうがきれいではないかと思い、紙コップの花火とプラスチックコップの花火を並べてみる。子どもたちに「どちらで作りたい？」と聞くと、「プラスチック！」と答える子どもが多かった。そのため、プラスチックのコップに好きな色のキラキラテープを貼ってコップを切り開き、花火をイメージした制作を行うことにした。

制作を始めると、「何が見えるかな？」とコップを覗いてみる子どもや、黄色、オレンジ、水色など明るい色を塗る子ども、「花火は夜だから」と黒や紺などを塗る子どももいる。そのうち、C児が「コップ切っているの？」と不安になって聞いてくる。「いいよ、どんな形になるかな？」と答えると、コップを切り始める。飲み

口の分厚いところをあらかじめ除いておくと、思ったよりもスイスイ切れたようで、切っていく感覚を楽しみながら「明日もやる！」「持って帰ってお家で見せる」と人気の遊びになる。

この事例では、紙を切るのとは違う感覚を味わう体験となった。飲み口の分厚いところをあらかじめ除いておいたため、思った以上にスイスイ切れる感覚を楽しんでいた。まだ立体のものを切ったことがなく、回しながら切っていく初めての体験でもあり、子どもたちは楽しめたのだろう。今までとは違った刺激であり、子どもの興味・関心が引き出される魅力ある環境となったと考えられる（写真3）。



写真3 花火作り

また、プラスチックコップを切り開くと、キラキラテープの下の油性マジックの色や、キラキラテープの接着面の銀色が見えて、意図しない花火も出来上がったが、子どもたちはそれも楽しんでいた。思わぬ発見であったが、紙コップとプラスチックのコップの違いを感じることもできた。素材に関わる体験は、表現の幅を広げ、表現する意欲や想像力を育てる上で重要だといわれる<sup>2)</sup>。今後、素材の特性を踏まえて表現をしていく土台となる体験であったのではないかな。

しかし、コップは飲み物を入れるという体験しかない子どもにとっては不安になる環境であったようだ。満3歳児入園の子どもは、紙コップやプラスチックコップを重ねる、並べる、貼り合わせるなど



の遊ぶための素材としての体験があるが、家庭で育ってきた子どもの中にはそのような体験のない場合がある。そのため、C児のようにコップは飲み物を入れるという体験しかない子どもにとっては、制作でそれ以外の使い方をするのが不安になったようだ。初めての体験に寄り添うことも保育者として必要だと感じた。

## 2) 遊びの中で役になりきって楽しむ

### 【事例4：アイスどうぞ】(2022年9月21日)

D児がX保育者と作ったアイスが入っている箱をもって「いらっしゃいませ、アイスはありますか？」とやってくる。粘土やパズルで遊んでいたE児やF児、G児が「ブドウの味ください」「メロンの味ください」と言いながらやり取りをしている。

その様子をH児は興味を持って見ていたので、「H児くんも、アイスくださいって言ってみてごらん」と言う小さな声で「アイスください」とD児に言った。何味のアイスを渡せばいいのか分からず、D児が少し戸惑った様子を見せたので、H児に「何色がいいのかな？」と聞くと、「ピンク」と答えたので、「D児くん、桃の味がほしいみたいだよ」と伝え、カップに入れて「どうぞ」と渡す。H児は、少しうれしそうに受け取った。

しばらくして、H児に「ごちそうさま、と言ってみる？」と聞いてみると、小さな声で「ごちそうさま」と言う。「大きな声で言ってみる？」と伝え、D児に聞こえるように「ごちそうさま」と言ってアイスを返す。

この事例は、保育者が間に入ったやり取りであるが、友達とのやり取りを味わう体験となっている。簡単な友達とのやり取りではあったが、安心できる保育者と一緒だったので、友達とのやり取りができたのであろう。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に「協同性」があるが、この協同性が育つ基盤は安心感といわれている<sup>3)</sup>。そして、安心して園生活を送ることができるようには、保育者との信頼関係が重要になってくる。普段から接し、安心できる保育者がいたことで、やり取りができたのだろう。D児にとってもH児にとっても、それぞれが友達を感じ、遊びが楽しく広がっていったと考えられる。

### 【事例5：アイス屋さんごっこ】(2022年9月27日・29日)

子どもたちははさみと糊などで制作を楽しんでいた。机を持ってきて保育者がアイス屋さんを始めてみる。画用紙を半円に切って繋げてアイスを作ったり、半円に切った残りの部分を使ってチョコスプレーのようなトッピングを作ったりして、自分の好きなアイスを作っていく。紙に絵を描いてアイスを作る子どもは、タブレット端末で好きな味(色)のアイスを調べて、本物と同じように描こうと頑張っている。

そのうち、保育者が用意したアイス屋さんで自分たちで作ったアイスを持ち寄って、「いらっしゃいませ！」と元気な声でアイス屋さんごっこが始まっていく。

28日は園外保育のためアイス屋さんごっこはできなかったが、29日もアイス屋さんごっこを楽しんでいる。店の前に「お客さんはこっちで〜す」と椅子を並べる子どもがいたり、「〇〇ください！」とお客さんになりきる子どもの姿があったりする。アイス屋さんになっている子どもたちは、紙に自分の好きな色のアイスを描いてメニュー表を作る。メニュー表ができると、アイス屋さんになっている子どもが「どれがいいですか？」と聞き、お客さんになっている子どもが「じゃあ、この〇〇色をください」と注文すると、自作アイスを出してくれる。どんな色のアイスを注文しても、同じ自作アイスが出てきて「次は〇〇色になるからね」と話し、イメージで味と色が七変化するアイスを考案する子どももいる。

また、「レジスターやお金がいる」と、Y保育者と一緒にレジスターやお金づくりをする子どもも現れる。画用紙に四角と丸を描き、思いつく数字を書き込んでいく。さらに、「みんなのおうちのアイスはどこにある？」と聞くと、「冷蔵庫！」「勝手に開けるとダメなんだよ」などと答える。「じゃあ、幼稚園にないから作ろうか？」と、小さい段ボールを切り開いて冷蔵庫づくりを提案し、子どもたちの意見を取り入れながら冷蔵庫を作っていく。

この事例では、子どもたちが楽しんでいることを生かしてアイス屋さん繋げていった。保育者が机を持ってきて始めたアイス屋さんであるが、自分たちの制作したものと繋がったためアイス屋さんのイメージが広がっていった。それまでの経験から、お店にはどんなものがあり、何を作るとよいかを考えて制作をしていく、またお客さんだったらどんな風に注文するのかを考え、それぞれの役を楽しむよう



写真4 アイス屋さんごっこ



写真6 子どもが作ったお金



写真5 冷蔵庫作り

になっていっている。店員さんになったりお客さんになったりと、それぞれの役を楽しむ中で、子どもたち同士が繋がっていった（写真4）（写真5）。

冷蔵庫の制作については、子どもたちが保護者ともアイス屋さんのやり取りをしたくてアイスを持ち帰ろうとすることが多かったため、わくわくフェスウィークまで幼稚園にアイスを置いておきたくなるためには何があればよいか考えての提案ではあったが、子どもたちのイメージがどんどん広がっていく遊びとなった。扉をどうするか、どのようにアイスを入れておくとかいかなど、子どもたちもいろいろと考えることができた（写真6）。

わくわくフェスウィークでアイス屋さんの展示をしたが、そこでも「アイスをどうぞ」と、店員さんになって保護者とのやり取りを楽しんでいた。子

どもたちにとっては、アイス屋さんに関する制作は単に制作したものというよりも、遊びの1つのアイテムとして子どもたちの生活や遊びの中にあっただのではないか。役になりきることによってどんどんイメージを広げていく体験だったと考えられる。

（2）4歳児の世界 ―これまでの体験から表現に自信と喜びを感じる

4歳児は、3歳児以前の個と個の関係の中で自分の存在を確立していく時期であり、集団と個との関係をつかみ集団の中で自分を意識し、その関係の中で成長していく時期であるといわれる<sup>4)</sup>。そのため、集団の中で自分の居場所や存在意義などを見出しながら成長していく。そして、認められることで自信をつけていく。そこで、友達や保育者に認められ、自信を持って表現し、様々なアイディアを出しながら「わくわくフェスウィーク」へと繋げていく過程を見ていく。

1) 遊びの中でいろいろな表現が湧いてくる

【事例6：フウセンカズラ集め】（2022年9月2日）

I児、J児、K児が、外遊びでフウセンカズラ集めを楽しんでいる。フウセンの中から種がたくさん出てくるのが嬉しいようだ。「透明の紙コップに入れてみる？」と提案し、種だけでなく「（フウセンカズラの）袋も集めたらいいかも」と伝え、と、「シャインマスカットだ！」と大喜びする。茶色の袋もあることを伝え、と、「まだできていない」と言う。保育者が手に取って見

せると、色の違う種が出てきたことを喜ぶ。K児が「お茶だ!」と言う。子どもたちがたくさん種を集めていたことやK児がお茶と言っていたことから、種屋さん、ジュース屋さんを提案する。

お店屋さんをするために、机をテラスに用意する。子どもたちが「看板が欲しい」と言うので、画用紙に文字を書くことになる。K児は文字に悩んでいたようなので、見本を書きながら自分でチャレンジできるようにする。I児は、英語で“OPEN”と書く。L児は、種の絵やコーヒーをイラストで描く。

昼からもフウセンカズラを集める。他の子どもたちも興味を持ち、クラスみんなで集めていく。子どもたちはお店にはメニュー表も必要と考え、作り始める。I児はカタカナで書き、L児は冊子のように開けられるよう2枚の画用紙をテープで貼り合わせるなど工夫して作る。M児は、フウセンカズラの種だけでなく葉も集め、葉っぱジュースを作り始める。

子どもたちは、遊びの中で様々な発見をする。自分たちで気づくこともあれば、保育者が見せることで気づくこともある。フウセンカズラの種の違いや袋の違いは、保育者が実際に見せることで気づくことができた。遊びの中で感じ、体験しながら様々なことを知っていくのである。子どもたちが不思議さや面白さを感じ、いろいろな思いを持つことにより遊びが広がっていく(写真7)。

そしてその根底には保育者や友達とのやり取りがあり、それぞれの思いを伝え合うことがある。子ども



写真7 フウセンカズラ集め

もたちの思いを受け止め、言葉にして伝えながら更なる考えを引き出していくような保育者の関わりが必要であり、また子ども同士のやり取りの中で様々な考え方や思いがあることに気づいていく。

それぞれが思いを伝えるためには、様々な思いを表現しても受け止めてくれる雰囲気が重要である。子どもたちがお店屋さんをするにあたって、看板やメニュー表などを作ったが表現の仕方には子どもの個性が光っている。それぞれが自由に表現してもよい雰囲気があったからこそ、友達と違う表現でも自信をもってできたのではないか。子ども同士それぞれの思いの詰まった自由な表現に触れることでお互いに刺激し合い、いろいろな表現が生まれ、次はこうしたいという思いへと繋がっていくのであろう。

また、子どもが自由に発想するためには、これまでの体験も関係してくる。子どもの体験はそれぞれであり、そこから感じる思いも様々である。その体験を積み重ね、思いや表現を認められることによって、豊かな表現が生まれるのではないか。保育者として様々な体験から生まれる子どもの自由な表現を大切にし、子どもの表現のよさをお互いに感じられるようにすることが重要であろう。

## 2) 自分の思いを自由に表現することが楽しい、次はこうしたいという思いが溢れてくる

### 【事例7：ホイップ作り】(2022年9月21日・22日)

紙粘土と少量の水で、生クリームのような柔らかさになる。このことを使って子どもたちはケーキを作りたいということで、ケーキ作りを始める。いつもの紙粘土の感触と異なり、グニョグニョになること、手に紙粘土がたくさんつくことが少し嫌という子どももいたが、ヨーグルトの容器などにホイップを塗り、ケーキのように形をとっていく。絞り袋も用意していたので、本物のケーキをイメージしながら絞ってみることにチャレンジしていく。

木の枝、葉っぱを外遊びで集め、秋の自然物に触れて遊べるようにしている。「ケーキで使ってもいいよ」と言葉をかけると、枝を折ってきれいに並べたり、蠟燭のように立てたり、葉っぱを重ねて貼ったりしてデコレーションをして、オリジナリティのあるケーキが出来上がる。

前日に引き続きケーキ作りをする。クリーム状にする過程では、紙粘土の感触を手でこね



がら楽しむ。昨日、「白以外の色でホイップをしたい」と言っていたので、ピンク、茶色、オレンジの3色を子どもたちと一緒に選ぶ。本物のケーキのようにホイップが出ることを喜びながら、ホイップで飾りにしたり周りのデコレーションにしたりする。N児は、ビーズで顔を表現して、顔つきケーキにする。それを見てL児も同じように作ってみたいと顔を表現する。

この日まで一度、紙粘土と少量の水でのホイップ作りをしていることもあり、子どもたちは見通しをもって遊びを進めることができた。生クリームのような柔らかさになることから、ケーキを想像し作ってみることになった。保育室の環境の中にヨーグルトの容器や絞り袋、木の枝や葉っぱなどもあったため、どんどんケーキのイメージが広がり、次はこうしたいという思いが生まれていった。さらに「白以外の色でホイップをしたい」という思いを受け止めることでデコレーションを楽しむこともでき、自由に思いを表現する遊びとなっていく。このような体験を積み重ねることで、表現することが楽しく、夢中になって遊びを楽しむことができるのではないだろうか（写真8）。

また、L児は友達のN児が作っている表現をみて、顔つきケーキをやってみたいとチャレンジしている。友達の表現のよさを感じ、それを取り入れて遊びを発展させている。子どもが心に感じていることが、表現を通じて他の子どもにも伝わり、友達同士で広がっていくよい機会となったように思う。



写真8 ホイップ作り

【事例8：ケーキ作り】（2022年9月27日）

子どもたちは紙粘土でケーキ作りをしている。紙粘土と少量の水で、生クリームのような柔らかさになることは体験していたが、紙粘土と混ぜる水の量によってクリームの固さが変わり、ケーキの土台にクリームを塗った時のケーキの見た目も変わることによって子どもたちが気づく。「これくらいのお水にしたならきれいにできるかな？」と、柔らかさが変わるのを楽しみながらケーキ作りを進める。ケーキのトッピングも保育者が用意したものではなく、自分で考えて作ったものを乗せたいと、それぞれのこだわりの詰まったケーキを作っていく。

これまでの遊びの中での気づきもあったが、さらにいろいろと試すことで紙粘土と水の加減でクリームの柔らかさが変わることを理解した。そしてそれをケーキ作りの中で表現しようとする子どもの姿があった。何度か体験したことも相まって、子どもたちは試行錯誤しながら自分の思いを表現しようとしていた。試行錯誤の中で、「次はもっとこうしたい」と自分の思いやイメージが膨らんでいったのであろう。そしてそこにはその思いを実現できるための環境があったのだと思う（写真9）。



写真9 ケーキ作り

【事例9：ケーキ棚作り】（2022年10月4日・5日）

ケーキ作りを楽しんでいる子どもたちが、「ケーキ棚が欲しい」と言ってきたので段ボールで棚を作ることにする。少しずつ子どもたちのイメージに近づいてくると、ガムテープで止



めたり段ボールカッターで段ボールを切ったりと、自発的にやろうとする。「ケーキに名前（看板）を書いてみたら？」と提案すると、「にこにこケーキ」「だいすきけーき」「ほいっぷけーき」など、自分の作ったケーキにそれぞれの名前を付けていく。

翌日もケーキ棚作りをする。すると、N児が「色を付けたい」と言ってきたので絵具で色を付ける。I児、K児、L児、O児も加わる。本物のショーケースのようにしたいと白色で、段ボールの色が見えないように細かいところまで塗っていく。

P児は、冷蔵庫を作り始める。「扉が欲しい」と言うので、段ボールに合わせて線を描き、段ボールカッターで切っていくことにする。切った余った段ボールで、冷蔵庫の中の仕切りを作っていく、段ボールの大きさに合わせて切ったり貼り付けたりして丁寧に仕上げていく。J児は、余った段ボールで棚の飾りつけを始める。輪っかにしたり貼り合わせたりして自由に組み合わせる。

ホイップ作り、ケーキ作りを通して、子どもたちのイメージが次々と膨らんでいっている。ケーキを並べる棚や冷蔵庫など、ケーキと結びつくものをどんどんイメージしながら制作を楽しんでいる姿がある。また、保育者も子どもたちのイメージが膨らむように「ケーキに名前（看板）を書いてみたら？」と提案し、イメージがさらに膨らむように援助をしている。子どもが自由に思いを表現していくためには、どんどん子どものイメージが膨らみ、自信をもって表現できるような援助が必要であろう（写真10）。



写真10 ケーキ棚作り

段ボールで冷蔵庫を作る制作は、年少の【事例5】でも行われている。年少の場合は、保育者が中心となって子どもの意見を取り入れながらイメージを広げていったが、この事例では子どもが中心となり、自分の力で冷蔵庫を作り上げていった。子どもたちの発達の違いもあるが、段ボールという素材で遊びつくしたことがベースにあると考えられる。叩く、乗る、踏む、入る、切り開く、貼り合わせるなど、年少、年中と友達を感じながら遊んできた経験が生きているのだろう。素材で遊びつくすことも表現の幅を広げる手助けになるのではないかな。

#### 4. まとめ

「わくわくフェスウィーク」において3歳児では、プラスチックのカップを切り開いた花火（写真11）と、アイス屋さん（写真12）（写真13）が展示された。



写真11 花火の展示



写真12 アイスクリームの展示



写真13 アイス屋さんの展示



写真14 展示したアイス屋さんで友達と楽しむ

花火の制作までには、色水ジュースを太陽の光にかざすとキラキラするという感動体験、様々なテープやカップに出会うことで同じ「もの」でもいろいろな種類があり、それぞれの使い方やその性質が異なっていることへの気づきなどもあった。3歳児では初めて体験することも多く、不安もある。しかしそこに保育者が寄り添うことで、子どもたちは「初めて」を楽しめたのだろう。今までとは違った感動や刺激がそこにはあり、子どもの興味・関心が引き出される結果となったのではないかな。

アイス屋さんでは、子どもたちの制作遊びをもとにごっこ遊びへと繋げていった。そしてその過程を展示する形をとった。過程を展示したために、その展示で終わりではなく、友達や保護者と一緒に展示物で遊び始める姿も見られた（写真14）。遊びの1つのアイテムとしてアイス屋さんが子どもたちの生



写真15 ケーキ屋さんの展示

活や遊びの中に存在したために、「わくわくフェスウィーク」の期間中にも発展していくものとなったのではないかな。「生活や遊びを通して」という意味を考えさせられるような展示であったと思う。

また4歳児では、ケーキ屋さん（写真15）をはじめ恐竜や化石、パン屋さんなど、子どもたちそれぞれの思い思いの表現が展示された。事例としては、ケーキ作りを取り上げたが、試行錯誤する中で、「自分の思いを自由に表現することが楽しい、次はこうしたい」という思いが溢れてくるのが分かる。自分の思いを自由に表現することが楽しいと感じるためには、遊びの中で様々な表現がわいてきて、それを様々な形で表現しても受け止めてくれる雰囲気が必要である。そのような体験をすることで、友達と違う表現でも自信をもって行うことができるのではないだろうか。さらに、子ども同士それぞれの思いの詰まった自由な表現に触れることでお互いに刺激し合い、新たな表現が生まれ、次はこうしたいという思いへと繋がっていくのであろう。

これらの感動体験から生まれるイメージや、子ども同士で刺激し合う体験から生まれる次はこうしたいという思いなどが、子どもたちの様々な表現へと繋がっていくのだろう。そして、「わくわくフェスウィーク」期間中に子どもたちが保護者に自分の表現を生き生きとした表情で語ろうとする姿（写真16）



写真16 放課後の親子の様子（年少）



写真17 放課後の親子の様子（年中）

（写真17）のように、その思いをもっと語りたい、もっと表現したいと、子どもの主体性までも育てていくのではないだろうか。

今回は、3歳児、4歳児の記録を中心に検討を行ったが、この時期の体験がベースになって、自由な表現がさらに積み重ねられて5歳児の体験へと繋がっていくのだろう。「感じる」、「考える」過程を経て表現は磨かれ、発展していくといわれる<sup>5)</sup>。園での感動体験や気づきが基となって、子どもなりに考え、イメージして、友達と創造し合う夢中の時間へと繋がっていくのではないだろうか。

また、この時期には友達との関係も深まり、やり取りを通して思いや考えなどを共有できるようになる。そして思いや考えを共有する体験の積み重ねによって、共通の目的を見出し、工夫したり協力したりして、遊びが展開されるようになる<sup>6)</sup>。これは「協同性」へと繋がる過程であり、5歳児の姿とし

て大切にしたいと考えている。

次年度は、このような活動を続けていく中で、5歳児の表現につながる「協同的な学び」の体験やそのための支援について、幼稚園のカリキュラム全体を通して考えていきたいと思う。

## 註

- 1) 文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, p.236
- 2) 同上書, p.239
- 3) 無藤隆(2018)『10の姿プラス5・実践解説書』ひかりのくに, p.22
- 4) 小林美沙子(2015)「4歳児の「協同的体験」を支える保育者の役割について—4歳児クラスにおける一年間の取り組みから—」奈良教育大学『次世代教員養成センター研究紀要』1, pp.91-99
- 5) 前掲書3), p.79
- 6) 同上書, p.23



